



私は、2014年4月より、レジデントとして大阪医科大学附属病院病理部病理診断科に入局し、現在は病理学教室及び病理部病理診断科を兼務し、診断・研究・教育に従事させて頂いております。病理専門医、細胞診専門医としてはまだまだ若輩者ですが、ご

縁がありまして会報への寄稿の機会を頂戴いたしました。

大阪医科大学には、病理専門医研修の一環として細胞検査士が検鏡する前の段階で、専攻医が細胞診のスクリーニングを行う「プレスクリーニング」というシステムがあります。まっさらなプレパラートを渡されて、油性ペンを使って自分で点を打っていく作業は、細胞検査士が行っている業務と全く同じもので、かなりの負担がかかるトレーニングです。最初のうちは、子宮頸部擦過細胞診2例であっても、午前中すべての時間を使ってしまうことさえありました。徐々に慣れていくとはいえ、細胞検査士の方がどれだけ苦労されているかがよく理解できる修行だと思えます。専攻医が点を打ち終わった症例は、細胞検査士に渡されて、さらにスクリーニングがなされた上で、細胞診専門医のチェックが入ります。最終診断が確定したあとに、専攻医の元に標本が返却され、不明な点や間違えた点は指導医や細胞検査士に直接質問して、細胞診について理解を深めることができます。このやり方の良い点は、チェックする側にまわると目にすることが少ない陰性症例における良性的細胞所見の勉強になることです。始めのうちは、何でもかんでも悪性細胞に見えてしまうのですが、実は組織球だった、単なる中皮細胞だった、というのはよくあるもので、そういった細胞診専門医や細胞検査士なら当然のように流してしまう基本的なことを、何度でも質問できたのは本当に有り難かったです。また、このようなトレーニングの目的は、病理専門医試験や細胞診専門医試験に合格するためのものですが、将来的な病理医としてのキャリア形成の一助としても機能するように思います。大阪医科大学の連携病院には、細胞検査士が不在の病院もあり、そういった病院で働く場合に、自信を与えてくれる良い経験になるのではないのでしょうか。

細胞診専門医試験についてのいわゆる試験対策は、病理専門医試験が終わってすぐに始めました。まず、細胞診専門医

試験の筆記試験の過去問では、選択肢の正誤を理解するのに、一つずつ教科書や参考書で調べる必要がありました。過去問の検討というのは、純粋に座学的な部分がありますので、本格的な過去問演習の繰り返しを始めるための前準備に時間がかかります。そして、帰り道の電車の中で問題集を徹底的にやり尽くしました。実際に使用したものは、「細胞検査士細胞像試験問題集（医歯薬出版）」「読む・解く・学ぶ細胞診 Quiz 50 ベーシック編・アドバンス編（診断と治療社）」です。これらの問題集を中心にひたすら演習を繰り返しましたが、病理専門医試験でも使っていますので、通算すると300周ぐらいはページをめくったのではないかと思います。

もちろん、検鏡問題の試験対策も欠かせません。近隣の大学で細胞診の講義を担当している技師の方がまとめた陽性症例のセットをお借りして、典型的な症例の実物をみる練習もしました。時々、病理部の技師さんが精度管理目的でカンファレンス顕微鏡を覗いているのを通りがかりにそっと覗いてみて、「腺癌ですか？」と尋ねると「違います。小細胞癌です。先生、そんなものわからないんですか！」と、突っ込まれた気がします。

そんなこんなで試験当日になったわけですが、私が受験した昨年度は病理専門医試験が4年研修生と3年研修生が同時に受験する年だったので、病理専門医試験の合格者数が多い年度でした。病理専従であれば、同じ年にまとめて受験することが多いので、必然的に細胞診専門医試験も受験者数が増えてしまいます。人数が多い分、会場や顕微鏡の準備の都合なのか、グループ分けが複雑になり、さらに一番早い受験生は朝の7時30分に集合でした。朝が弱い私には不安な年でしたが、運良く真ん中ぐらいの時間帯の集合時間に当たり、ホッとしたのを覚えています。しかし、そこは不安が消えないもので、遅刻しないように、なんと最初のグループが試験を開始した直後ぐらいに会場に到着して、待機場所で2時間近くも居眠りしながら待っていたのは、合格した今となってはいい思い出です。

最後に、細胞診を御指導くださいました大阪医科大学病理学教室の先生方、どんなに小さな質問にも丁寧に答えて頂きました大阪医科大学附属病院病理部病理診断科の技師の方々、また、この記事に推薦してくださいました川崎医科大学の森谷卓也先生に、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。